

かゑらじと かねて思へハ 梓弓 なき数に入る 名をぞとどむる 四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第9号

平成27年5月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

日本近代史を切り拓き、明治維新を成功に導いた原動力

楠親子に脈々と息づく武士道の精神と究極としての散り際の潔さ

私たちの楠正行。その生きざま、人間像を読み解く

以下に掲載する文章は、四條畷市主催で開かれた「楠正行シンポジウム（第1回）」の資料として扇谷昭（四條畷市産業振興アドバイザー在任中）が作成した文章で、一部助筆修正し、転載したものです。

● 正行の生き様（戦いぶり）を追う

公家政治から武家政権への移行期 避けて通れなかった南北朝の対立

楠木正成の遺児として、南朝武士の期待を一身に背負いながら、公家優先社会の中で、南朝の総大将になり得なかった悲劇 → 四條畷の合戦

しかし、史料から見えるのは、正平2年（1347）8月から正平3年（1348）1月5日に至る、たったの半年。それも断片にすぎない。

太平記に綴られた四條畷の合戦。しかし、それは感動的ではあるが、余りにも短い物語である。正行の人間像については、その一部が垣間見えるだけで、いったいどのような人物であったのかは知るよしもない。

◆この頃の構図＝3年前に北畠親房が吉野に入り、当時、後村上天皇20歳、北畠親房55歳、正行22歳で、南朝の実権は公家筆頭の北畠親房にあった。

<南朝> 北畠親房は、後村上天皇の京都環幸に向け、南朝方武士に決起を促していた ※正行の心情＝父の遺訓を守り、正統な帝をお守りし、南朝復権を目指す。

<北朝> 足利尊氏は、南朝の雄、楠正行の取り込み・包囲網作戦を画策するが、藤井寺、住吉・天王寺の合戦に相次いで大敗を喫し、全対決止む無しに。

桜井の訣別11年後、

歴史の表舞台にこつ然と登場した正行の破竹の進撃

① 隅田城攻略戦 正平2年8月10日

河内と吉野を結ぶ要所、正成時代からの宿敵で、北朝の戦略拠点のひとつ＝隅田城：正行にとって背後にある後顧の憂いを絶つ → 海上を封鎖し補給路を絶った上で、電光石火動き、僅か1日で陥落。

② 池尻の戦い 正平2年8月24日

細川顕氏、「池尻を占拠せよ」と、河内の守護秋山に命じたのに対し、正行軍、東西から急襲し、城を出た秋山隊300人を壊滅させる。

③ 藤井寺の合戦 正平2年9月17日

前哨戦 八尾城攻撃（9月10日）。八尾城を攻撃すると見せかけ、敵の動きにあわせて、本隊を藤井寺に突く作戦。北朝・細川顕氏3000の兵に対し、正行軍700。大軍を装い、かがり火作戦 寝起きさま

を急襲する。 → 慌てふためき、天王寺に退却・敗走する細川軍 苦りきる尊氏、そして戦勝に沸く吉野。

④ 瓜生野・住吉天王寺の合戦 正平2年11月26日

尊氏は、山名時氏、細川顕氏連合軍1万人を送り込み、迎え撃つ楠勢は、正行先頭に1800人。楠軍は、楠・和田本隊連合軍と、和田別働隊で挟み撃ち作戦。楠勢と住吉の山名時氏軍が、瓜生野にて合戦に及び、山名軍敗れて敗走。天王寺の細川軍、劣勢を見て、退却 → 渡辺橋に殺到 → 川におぼれる敵兵を救った渡辺橋の美談 この時、人として生きる喜びを知った敵の雑兵たち。「義」（正しいこと）「礼」（社会的秩序に対する礼）に生きる正行の人間像 → 後日、四條畷の合戦に討死覚悟で参戦した約100名。

⑤ 吉野に参内 後村上天皇に別れの挨拶 正平2年12月27日

「高師直・師泰兄弟に組み合い、わが身命をかけて戦い、彼等二人の首をわが手中に納めるか、正行・正時の首を彼等に取りられてしまうか、その二つの内いづれかで合戦の勝敗を決することでしょう」と正行。

「この度は天下分け目の戦い。軍勢の進退を適切に。そなたは私の手足のように最も頼りとする臣下である。命を全うするように」と、後村上帝。

正行一行は、後醍醐天皇の御陵に参拝し、「苦戦となれば、皆討死」と最後の別れをし、如意輪堂の板壁に、辞世の句を残す。

かゑらじとかねて思へハ梓弓 なき数に入る名をぞとどむる

（二度と生きて帰るまいとかねてから覚悟を決めたので、死にゆく者の名をここに書き残します）

● 四條畷の合戦における正行の戦略

南大和に誘い出し、背後を絶つ作戦

敵の大軍を、地の利を最高度に利用しうる南大和に誘い出し、背後を絶って叩く作戦。誘い出すためには、出撃してのち後退し、恰も楠・南朝方が壊れたように見せ、敵に勝利感を与えること。

- ・楠軍（中軍）が師直軍を攻撃すると見せかけ四條畷で全対峙する
- ・天王寺方面の師泰の軍勢を和田勢（左軍）が攻撃する
- ・この間、師直本隊に対しては、生駒山に布陣する四条隆資軍（右軍）が往生院・暗がり峠で阻止し、釘付けにする
- ・和田勢が師泰軍を淀川に追い落とししたならば、淀川南岸を東進し、師直の背後を絶つ
- ・この作戦の鍵は、四条軍が丸一日、往生院・暗がり峠の線で、師直軍を牽制し、もちこたえること

南朝の総大将たりえなかった正行の悲劇

この作戦の最大のポイントは、敵に勝利感を与える後退時期の判

断であった。しかし、正行が南朝全軍の総指揮官であってこそ、その判断は可能であり、公家方の北畠親房や四条隆資、まして若い天皇、南朝の征夷大将軍・興良親王（後醍醐天皇の孫・護良親王の子）にその任が務まるものではなかった。

父・正成は湊川の戦を前に後醍醐帝・公家に見放されたが、子・正行もまた南北朝の総決戦の場で、南朝の前衛を担う一隊長として送り出される悲運にあうことになったのである。

正行に立ち上がった公家優越・武家蔑視の思想

正行最後の敵は、何を隠そう足利尊氏ならぬ、味方であるべき公家優越・武家蔑視の思想の持ち主、北畠親房その人であった。

北畠親房は、「神皇正統記」を記し、武士は朝廷に仕えて忠を尽くす存在で、公家が天皇を補佐し分掌し、武士はその公家の下にあって忠をいたさばよい、という思想の持ち主であった。

● いよいよ迎えた四條畷の合戦

高師直 4 万の大軍に対し、正行 1 千騎で立ち向かう

四條畷の合戦時の双方の布陣は以下のとおり。（出典：「楠正行」田中俊資著）

<北朝・足利軍>

本隊：四條畷・高師直軍 37,150 人 搦め手：天王寺・高師泰軍 11,300 人 計 48,450 人

<南朝・吉野朝廷軍>

本営：巻尾山・興良親王 300 人 守備隊：東条・楠木正儀 1,500 人 吉野：300 人 右軍：生駒山・四条隆資 6,000 人 中軍：往生院・楠正行 1,000 人 左軍：池尻・北畠親房 1,500 人 計 10,600 人

太平記古伝に“正成所領七千貫”とあり、一貫概ね七、八石とすれば後世の五万石ぐらい。五万石大名の戦時勢力は約三千人ほどで、四條畷の合戦後、楠一族は、正儀が高師泰と一年以上にわたって抗戦を続けるだけの勢力を温存しており、東条守備、吉野守備を合わせ考えると、私は、田中俊資氏同様、この合戦に参陣したのは正行軍 1 千騎を妥当と判断する。

賊の獲るところとなるなかれ

正平 3 年 1 月 3 日 正行、東条から出陣。

同年 1 月 4 日 往生院に着陣。天王寺の合戦時、渡辺橋で救った敵兵約 100 名、参陣。

同年 1 月 5 日 早朝、戦い始まる。

前衛の武田（2500 人）を破り、第一集団の細川（550 人）・仁木（1800 人）・千葉（2700 人）・宇都宮（650 人）の諸勢 5700 人を蹴散らした頃には、既に四條軍は退却に移っていた。太平記にも記されていない四條軍の不可解な早期退却。そして、正行は退却することなく、高師直めがけて前進、四條畷を目指したのである。

山麓の背後から攻撃してきた佐々木道誉（2000 人）を敗走させ、第 2 集団の細川（1900 人）・今川（2100 人）・佐々木（3100 人）の 3 軍諸勢 7100 人は正行への畏敬の念からか、師直への反感からか、それとも徒歩兵を傘形に配置し一糸乱れぬ陣形で進軍する正行軍を恐れたからか、全面对決を回避し、潰走した。しかし、正行軍が、現在の南野、四條縄手辺りで高師直本隊と対峙する頃には、その大半を失い、300 人ほどとなっていた。

最後は、多勢に無勢。四周から矢を射られ、身動き不能となるなか、「賊の獲るところとなるなかれ」「この先、正儀を助けて、わしの望みをかなえてくれ」と、傷の浅い諸将に言い残し、正時と刺し違えてその命を絶った。

● 楠一族に見る武士道の精神

後醍醐天皇と楠木正成の利害一致

この時代、その背景に「公家社会」と新興「武家社会」の大きな対立があった。

そして、後醍醐天皇は、天皇親政を目指し、反・足利幕府の立場を鮮明に行動した。

また、楠木正成は、幕府の非御家人、当時の悪党としてはとびぬけた存在で、運輸・流通業、辰砂や金剛砂等の鉱物資源を取り仕切る商人として近畿一円を支配していた。正成は、土地にしがみつき民百姓を支配下に置くしか自らの糧を稼ぐ手段を持たない武家支配を倒し、商売・流通等をより安全かつ自由にできる新しい社会＝体制の構築を目指し、反・足利幕府の立場に拠った。

ここに、後醍醐天皇＝南朝と、楠木正成＝楠一族の利害が一致したのである。

そして、この二人の雄の接近を可能にしたのが、後醍醐天皇の命を受け全国に散った側近の公家の存在で、日野資朝、日野俊基等である。

父子ともに、立てた志を貫いた散り際の潔さ

しかし、父・正成が足利尊氏との和睦策や帝の比叡山臨幸策を諫言・献策するも退けられ、「君の戦、必ず破るべし」と湊川に散ったと同様に、子・正行も、自らの力ではどうすることも出来ない公家社会の厚い壁に阻まれ、四條畷に散ることに。

敵に勝利感を与えて、東条に引き、地の利を活かして師直・師泰軍をたたく作戦を立てたものの、南朝公家たちの理解が得られず、身分の低い己の立場ではその実現の困難さを知り、討死覚悟で高師直に挑み、潔く散っていったのが正行の心情、と分析する。

そして、この覚悟は、戦いを前に吉野を訪れ、後村上天皇に別れの挨拶をし、如意輪堂の板壁に辞世の句を残した時点で、すでに固まっていたものと思える。

ここには、今の世相に最も欠ける「己を空なうする精神」、すなわち、究極としての散り際の潔さが脈々と息づいている。私は、四條畷の合戦の本質をここに見る。

「義」「忠」「礼」という自らの志に生きる究極の美学

私は楠一族に武士道の精神を見る。

実践の「勇」、英知の「智」、武士の情けの「仁」、誠実足らん「信」を最下段に、その上に、正しいことを行う「義」、社会的規範の「礼」を置き、最上段に、身体を張って主人に仕えもし、諫言もする「忠」、そして究極の名声を得る「名誉」を位置づける、これが新渡戸稲造の説いた武士道の精神である。

私は、智＝英知、仁＝武士の情け、勇＝実践はもちろんのこと、正統な南朝を復権するという「義」、寄せ手塚・見方塚建立の精神、渡辺橋の美談にみる「礼」、後醍醐帝への和睦策・比叡山臨幸策の諫言・献策にみえる「忠」の精神、すなわち武士道の精神を、楠一族に見るのである。

正当な帝の復権、南北朝の統一を夢見て、自らの志を立てたなら死をも顧みず突き進むという美学、潔さに生きた正成、正行親子。

そして、二人とは逆に、生き続けることで忠を尽くそうとした正行の弟・正儀。

これら楠一族三代の生きざまがあったればこそ、日本の近代史を切り拓くこととなった明治維新が成功したと言えるのではないだろうか。

<「嗚呼忠臣楠子之墓」楠木正成墓碑を訪れた幕末の志士たち>

—— 湊川神社刊「神戸と楠公さん」より

吉田松陰、真木保臣、高杉晋作、坂本龍馬、伊藤博文、西郷隆盛、三条実美、大久保利通、木戸孝允等

■藤田精一著「楠氏研究」（大正 4 年） 第一編事実編・第一章楠氏系圖論～より抜粋

正朝の没落ととも、枯死に垂んとして、殆どその存在の有無さへ定かならぬ楠氏の如き、世にも不幸なる逆境者にありては、家譜または流裔の、全く闇黒の裏に葬り去られたるは、また應に已むを得ざる事に属す。但し存在するものは存在す。楠氏の忠烈は、未来永劫存在すべし。

（文責 「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）